

11 葛野大堰

京都市右京区

古代から京都には、たくさんの渡来人が住んでいたことは、よく知られています。外来の人々は異文化の人として意識される一方、高い文化を持つ人として尊敬されてきました。そんな中、五世紀後半、今の京都地方である北山背の地に移住してきた秦氏は、人々にどのような存在として受けとめられていったのでしょうか。

秦氏は、朝鮮半島東部の新羅系渡来氏族です。養蚕の氏族として広く知られていますが、最も特徴的なのは、治水灌漑・農地開発の土木工事に長けていることでした。その顕著な例が五世期末かともいわれる葛野大堰の造築で、今の渡月橋の辺りと推定されています。大宝令の注釈書「古記」にその名がみえ、確かな史実とされます。

古代の堰は貯水ダムでした。葛野大堰は葛野川（今の大堰川、桂川）の流れをせき止めて貯水し、流れと別の水路を設けて水量を調節し、洪水を防ぐと同時に、農業用水を確保するものであったと思われます。これにより、嵯峨野が開拓されました。葛野川流域の葛野の地には、平安遷都前後、山背国府が置かれ、葛野川東岸が平安京・右京となったのも、治水事業の成功によるところが大きいでしょう。

平安初期の九世紀はじめ、葛野川堤防の修造に力をつくした広隆寺の僧道昌もまた、秦氏の出身です。道昌のころ、秦氏ゆかりの寺社におこった治水・降雨の靈験譚がたくさん今に残っています。広隆寺薬師仏が葛野川の氾濫を治めた話、日照りで困っている時に雨を降らせた話、木鳥神社（蚕の社）の神が雨を降らせた話（広隆寺来由記、続古事談）。この秦氏ゆかりの寺社にまつわる靈験譚から、農耕をする人々の間で、葛野大堰の昔から積み重ねられた秦氏の業績が、道昌という花形の人物を通してたたえられ、寺社への信仰という形で頼みにされていたことがうかがわれます。秦氏は、中央政界への進出よりも在地豪族化の道をとった氏族です。そして長岡京・平安京の都市づくりに経済面でも土木技術の面でも大きく貢献しました。そこには古代の日朝の民族を越えたおおらかでたくましい共生の姿をみることができるといえます。

（菅澤庸子）

嵐山へ行かれたら、渡月橋を渡られたら、また保津川下りや夏の鵜飼などで舟に乗られることがあったら、土木建設の仕事や暮らしの向上の面で、大きく貢献のあった先人の苦勞と日朝友好のちぎりを偲んでみてください。



京都市右京区嵐山渡月橋上流

メモ●渡月橋から大堰川上流を見下ろすと、川底に段差があるのが判ります。渡月橋へは京都駅から市バスまたは京都バス「嵐山」、または阪急「嵐山」下車。葛野の秦氏については、京都市編『史料京都の歴史 右京区』（平凡社）、井上満郎『平安京再現』（河出書房新社）等がでています。